

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(35)

青葉さへ

見れば心の

とまるかな

散りにし花の名残と思へば

(西行『山家集』)

(たとえ葉桜であつても、眺めれば心が惹かれることよ。散つた桜の名残と思へば)

これは、芭蕉が栃木県日光を訪れた際の作です。結句に「日の光」として「日光」の地名を掛け、その和らかな光に照らされる新緑の目映さを織り込みました。初句の「あらたう」とは、感動したときに発する「あら尊し」の意味で、感謝の心が込められています。木漏れ日の中で、新しい命の芽吹きに触れたとき、自ずから「ありがとう」の思いが湧き上がってきたのではないのでしょうか。瑞々しい新緑に目をこ

青葉若葉の日の光

(『おくのほそ道』)

初夏を迎えています。西行を慕つた松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)は、この時節の若葉の煌きに目を奪われました。あらたうと

らせば、「ユズリハ」(樫)という樹木にも目が留まります。新年や祝いごとの飾り物としても用いられるユズリハは、初夏のこの時期に、古い葉と新しい若葉の両方を見ることとができます。ユズリハは、枝先に薄緑の若葉が顔を出すと、それを見届けてから旧葉が落ちます。それはまるで親から子へと上手に受け継がれるように見えることから「譲り葉」と名付けられたのでした。

日本は春・夏・秋・冬の四季に恵まれ、折々に美しい姿を見せてくれます。しかし、春が過ぎ去ると同時に夏となり、夏が終わっていきなり秋が始まるわけはありません。こうした自然の移り変わりについて、兼好法師(一二八三頃〜一三五二以後)は、『徒然草』の中で次のように記しています。

春が暮れて後に夏になり、夏が終わって秋が来るではありません。春



春に瑞々しい新緑となる楓は、秋の訪れを待ち次第に紅葉となる

は春のままで夏の気配を萌し、夏のうちから早くも秋は行き来し、秋はすぐに寒くなり、陰暦の十月(冬の初め)は小春日の暖かさになって、草も青くなり、梅も蕾を結びます。

木の葉が落ちるのも、まず葉が落ちてから芽を出してくるのではありません。木の葉が落ちるのも、慢しきれないで、古い葉が落ちるのです。新しい力を迎え取る気を既に用意しているのです、待ち受けて交替する順序がとても早いのです。

(『徒然草』一五五段)

兼好によれば、その季節の中に、もう次の季節

折り折りの記(69)

波多野 重雄

山風に子の髪流れ五月来ぬ

高尾山の一号路を登ると、路の辺の木の跡絶えたところを、子らが見通しが良いので駆け上がる、女の子の長い黒髪が舞い上がる。丁度、孔雀が羽を広げたように長髪は風に流れる、髪は女の命である。

風に流れる髪は一瞬人目を引き、その髪に五月の魂が込められているおもいがある。同時に、その子の未来を祝福する感もする。

(高尾山健康登山親睦会々々)

百観音霊場巡礼(十五)

夏遊逗子

下車向山門

登拜海雲山

夕陽創彩雲

碧海輝燦燦

厚木市 荒井 一雄

波しぶき

霧・霽と化し たちのぼり 夕陽が照らし 虹色変化

夏、逗子に遊ぶ

車を下りて、山門に向かふ...

登拜す、海雲山(岩殿寺)を...

夕陽が彩雲(七色に照り映える雲)を創り、碧海(あをみどりの相模灘)は燦燦と輝く...

が準備され、芽生える勢い(「つはる」)によって新旧交代が行われると言います。芽ぐむことを表す「つはる」とは、妊娠の「つわり」と同じ表現ですが、そうした見えな内側からの力によって刻々と変化していると語った点は注目されます。桜の散り際など、どうしても滅び行く姿に目が行きがちになる中で、新しい命の鼓動を感じ取っているのです。

さらに兼好は、自然の四季(春夏秋冬)と、人間の四苦(生老病死)とを重ね合わせています。生まれ、老い、病気になり、死ぬという四つの苦しみが続いてくることは、四季の変化以上に早いものです。季節には春・夏・秋・冬という順番がありますが、死期は順序を待ちません。死は前からやってくるとは限らず、あらかじめ背後に迫っています。人は誰しも死があることを知りながら、身近にあるとは思

わないので、突然にやってくるのです。それはまるで、沖までの干潟が彼方まで続いていても、足もとの磯から急に潮が満ちて来るようなものなのです。

(『徒然草』一五五段)

「老少不定」という仏教語があるように、人間の寿命は分からないものです。老いも若きも年齢は関係ありません。生きている限り、老・病・死から離れることはできませんが、こうした苦しみ

の存在を心のうちに置けば置くほど、この与えられた命の尊さに気づくのもかもしれません。四時の移り変はるにも生老病死の心を感じ(宗祇『長六文』)

(宗祇『長六文』)

この爽やかな五月にもどこかに梅雨時の空気が含まれているのでしようか。青葉若葉の力強い息吹を感じつつ、そこに自分の命の恵み(芽ぐみ)も重ねてみます。(栃木北部教区普濟寺中)

星野高士先生 句碑除幕式



左・立子句碑 中・高士句碑 右・椿句碑

四月二十三日、星野高士先生(写真左)により、新たに句碑が天狗像脇に建立され、除幕式が執り行われた。句碑には次のように刻まれている。

古道にも風光る

高士先生は明治時代の俳人・高浜虚子の曾孫であたり、今回建立された句碑の両脇には、祖母の星野立子様、母の星野椿様(写真中央)の句碑がそれぞれ建てられている。